

情報

第3回アジア作物学会議に参加して

齊藤邦行
(岡山大学)

アジア作物学会 (ACSA) 主催のアジア作物学会議 (The 3rd Asian Crop Science Conference, ACSC) が1998年4月27日～5月2日の6日間、台湾、台中市の国立自然博物館を会場として開催された。第1回は1992年(ソウル)、第2回は1995年(福井)に続き、第3回を数える。参加者は16ヵ国、255名に達し、日本からの参加者は62名(内6名同伴者)で台湾の151名に次いで多数を占めていたが、これ以外のアジア諸国からの参加は限られていた。中国からは5名の登録があったが、発表はすべてキャンセルされ、ビザが取得できずに参加を見送った中国籍の研究者もいた。

台北中正空港を出ると、ACSCと書かれた紙をもつ女子学生に案内され、台中市行のバスに乗ること2時間半、全国大飯店(ホテル)に到着した。台中市は台北に劣らぬ台湾省政の中心地で、年平均気温23°Cと亜熱帯気候に属し、雨も多い。4月27日は登録のみで、4月28日9時にACSA会長 Cheng-Chang Li氏により開会が宣言された。その後台湾関係者の挨拶が続いた後、集合写真撮影が行われた。モーニングブレイクの後、石井龍一氏と Te-Tze Chang氏(台湾)による基調講演が行われた。本会議の統一テーマは「21世紀の需要に向けた地域食料の生産戦略」である。石井氏は「作物生理学者から育種家への提言」と題して、持続性の維持と生産性の向上を図る上で、光合成とシンク機能改良の戦略を圃場から遺伝子レベルに渡る広い視座から論じ、「We shall go hand by hand」の 슬라이ドで講演を終えた。Chang氏は「作物学者は何に貢献できるか?」と題して、豊富な国際機関での経験を背景に作物収量と品質の向上に貢献した研究プロジェクトを紹介するとともに、さらなる生産性向上とコスト低減のためには統合的技術開発と on-farm レベルでの研究協力の必要性を強調した。

昼食後、2会場に分かれてテーマ講演が行われ、4月29日、30日と引き続いた。ポスターセッションは4月29日15時30分から、コーヒーブレイク(飲茶ブレイク)と並行して2時間に渡り熱烈的な討議がなされた。第2回とは異なり、招待講演はなく、オーラルかポスターかは参加者の判断にゆだねられ、口頭発表61題の内11、座長15名の内2名、ポスター87題の内39が日本(台湾43)からの参加者が占めていた。テーマ講演とポスターセッションの課題は統一され、1) 環境ストレス、2) 持続的農業(SA)、3) 資源作物、4) 作物の改良、5) コメの収量と品質、6) 種苗の改良、7) その他の7課題であった。テーマ

講演は、1) では切断葉の老化、乾燥耐性、耐冷性、耐塩性、耐湿性、酸性土壌耐性など、栽培的、生理学的視点からの発表が、2) ではアジア各国のSA、緩効性肥料によるLISA陸稲栽培、IPMの経済評価、他感物質処理が作物生育に及ぼす影響について、特に水稻の作付体系として、日本とベトナムの田畑輪換栽培、メコンデルタにおけるN利用効率、中央ジャワ天水直播稲作の改善について、3) では食用アカザ、遺伝資源管理、薬用ハーブの組織培養、香料作物等の報告がなされた。4) ではバイオテクと植物育種、トランスジェニック植物の作成と遺伝子発現、PCRマーカーによる遺伝子分析、稲作起源、T/R比の品種間差、オーストラリア超多収系統YRL39の特性、日本産作物品種の家系分析、タバコへの細胞質雄性不稔の導入など多岐にわたった。5) ではIRRIの多収・良食味育種戦略と新旧品種比較、NPT系統の登熟改善、食味の品種間差と栽培条件の影響(韓国、台湾、フィリピン、タイ)、無機成分の粒内分布、散播水稻の密度反応など、6) では環境調節による移植苗の改良、AAPHにより誘導したトウモロコシ種子の劣化に及ぼすプライミング処理の影響、カラーソートによる劣化インゲン種子の検出と除去、7) ではトランスジェニック植物による‘タンパク質工場’、水稻群落の分光反射特性、水稻新規同化産物の分配・利用、陸稲根系の発達と養水分吸収、甘藷糖含量の調理による変化、雑草種子発芽の季節変化、ベトナムの農業研究、インドネシアの第2期緑の革命、水稻葉身ガス交換の内生リズム、ダイズ葉形・葉面積の遺伝、ダイズの葉形とCO₂利用効率の発表があった。ポスターセッションは日本からの参加者では、あまり真新しいものはみられず、台湾からの参



第1図 ポスターセッション会場

加者は口頭発表と関連した研究課題が多かった。全般を通じて注目されたことは、IRRI では新系統が現地適応試験にはいり、多くの国で多収と良食味、双方向の作物改良が進められていることを実感した。台湾でもコメの生産調整が実施され、松江氏らのポスターには台湾の食味研究者が殺到していた (第1図)。

夜の部では、28日に歓迎会、29日に台湾風ご飯アラカルト、30日はお別れパーティと、円卓を囲んで台湾料理と紹興酒をしこたま堪能した。その上、朝昼の飲茶ブレイク、昼食と、これでもかというほど台湾料理を食べつくし、帰国時に3kgほど体重をお土産にした方も多かったのではないだろうか。台湾式のパーティは挨拶も10分程度で、流れ解散と簡略的ではあったが、乾杯のあらしには多少疲れた。お別れパーティーでは学会旗が次期 Carpio

Carlos 会長(フィリピン)に手渡され、“See you in Philippines (2001)” で幕を閉じた。

5月1, 2日はエクスカージョンが行われ、手工芸センター、鹿谷農会(お茶)、九族文化村(先住民族)、日月潭(湖)、田尾農会(花き)と台中観光を満喫した。あまり、農業を見ることはできなかったが、水稻は年2作で水田には最高分けつ期のイネが続いていた。その他、台湾を特徴づける農村風景としてピンロウ樹(Betel nut palm)が大量に植栽され、果実は噛み料として道ばたで売られていた。

会議、エクスカージョンともに充実した、明るく、楽しい、そして美味しい6日間であった。台湾の運営委員会の皆様とお手伝いの学生さん達に、謝謝。